

# カンボジアにおける自閉症児の認識に関する 現地教員の意識調査

松葉 美渚

(Royal University of Phnom Penh, Master of Education)

KEY WORDS: 知的発達、カンボジア

## 【目的】

近年、カンボジア国内では「自閉症」という言葉がよく聞かれるようになった。カンボジア国内の政府管轄の特別学校は現在 6 校であり、うち、知的障害や自閉症児のための学校は 1 校のみである。インテグレートクラス、インクルーシブクラスと称する特別学級も全国にあるが、その多くは NGO によって運営されており、正確な数はよくわかっていない。そのため、何らかの障害を抱える児童が通常学級に通っていることが考えられるが、包括的なスクリーニングツールやガイドラインがないため、学校が障害のある児童・生徒を特定し、適切なサービスを提供することを阻んでいると指摘されている<sup>1)</sup>。カンボジアでは、もともと 14 の障害分類があり、そのすべてが身体に関するものであった<sup>2)</sup>。2008 年の統計データでは、障害は 5 分類にわけられ<sup>3)</sup>、2012 年以降、教員養成課程では 9 つの障害分類が使用されている。さらに、2017 年以降は、自閉症、ADHD、書字障害等の事例が紹介されるようになった。このように、障害児に関する意識は変化してきていると見られるが、義務教育段階から留年制度のあるカンボジアでは、通常学級の教員の障害に対する正しい知識やスキルは非常に重要である。そのため、本研究は、通常学校で働く現地教員の自閉症に対する認識・知識について調べることを目的とする。

## 【方法】

現地小学校教員 12 名に対し、オンラインにて半構造インタビューを実施した。さらに、12 名のうち「自閉症を知っている」と答えた教員には、インタビュー終了後、自閉症の特徴に関するアンケートを実施し、8 名から回答が得られた。インタビューおよびアンケートはすべて英語で実施した。なお、インタビュー冒頭には、協力者が自らの意思で回答を拒否、あるいは中断できることを事前に説明した。また、インタビューは、本人の了承を得たうえで録音し、書き起こしを行った。インタビューの回答は KHCoder を使用し、抽出語リスト、共起ネットワーク、対応分析を基に分析を行った。なお、今回のインタビュー調査では、他にも「Slow learner（学習が遅い児童）」への指導方法についても質問をしているが本研究では取り上げない。

## 【結果】

「自閉症を知っている」と回答したのは 12 名中 10 名であり、3 名が教員養成課程の授業で知った、5 名が働いている学校で行われている教員研修等にて知った、2 名がその他、という回答であった。また、「自閉症児を指導したことがある」と回答したのは 2 名、「会ったことがある」と回答したのは 1 名であった。インタビューから、自閉症児は「話すことが苦手、話すことが好きではない」「一人でいることを好む」と多くの教員から認識されていることがわかった。また、自閉症児に会ったことがある、指導したことがあるという教員 3 名は、上記の特徴に加え、「話し方に抑揚がなく特徴的である」「アイコンタクトができない」と

いった特徴があると認識していることがわかった。自閉症が障害の一種であるかという点においては、回答は様々であり、「障害の一種である」「障害とは視覚・聴覚障害のように目に見えるものであり自閉症は障害とは違う何かである」という意見があげられた。また、自閉症の原因については、生まれつきと外部環境の両方から引き起こされると認識している教員がほとんどで、その外部環境の多くが「親の育児の問題」という回答であった。自閉症児を通常クラスで指導できるかという点に関しては、十分な教員数の確保と、指導経験豊富な教師がいれば対応可能であると考える教員が多かった。なお、自閉症の特徴に関する知識を問うアンケートでは、1 対 1 で自閉症児を 2 年間指導したことがある教員のみが、正答率 84% であったが、それ以外の 7 名は、正答率 50% 程度、あるいはそれ以下となった。

## 【考察】

インタビュー及びアンケート調査を通し、各教員養成課程、各学校で教員研修が行われるなど、自閉症に対する関心が高まっていることが伺えるが、自閉症に対する知識は限定的であることがわかった。自閉症、ADHD、学習障害等の事例が取り上げられるようになったのは 2017 年以降であり、「障害とは視覚障害や聴覚障害のように目に見えるもの」と回答があったことからわかるように、身体的な困難さを障害ととらえている人も一定数いる。以上のことから、「目に見えない障害」の理解促進とともに、障害を適切に判断できるツールあるいはサポートが必要である。また、現場で働く現地教員は、児童に対する教員数の十分な確保、経験豊富な教員の雇用などが必要である感じているものの、自閉傾向のある児童を通常学級で指導することに対してポジティブな回答がほとんどである。障害のある子どもの教育に関する教師の研修、特に特別支援学校／学級で働く教師教育は大きく進展しているが、通常学級で働く教員に対しては、28 時間のカリキュラムの導入を除いて現職前研修は行われていない。国としてインクルーシブ教育を推し進めるカンボジアにとって、通常学級で働く現地教員の障害に対する正しい理解とスキル獲得、あるいは、通常学級にサポートに入ることができる専門的な知識をもった人材の確保は必須である。

## 【文献】

- 1) Hayes, A. & Bulat, J. (2018). Cambodia Situational Analysis of the Education of Children with Disabilities in Cambodia Report prepared for USAID/Asia Bureau, USAID/Cambodia Mission, Education Team
- 2) Kalyanpur, M. (2016). Inclusive education policies and practices in the context of international development: Lessons from Cambodia
- 3) National Institute of Statistics, Ministry of Planning. (2013). Cambodia Inter-censal Population Survey 2013 Final report

(MATSUBA Minami)